

目指す学校像	輝く笑顔 学ぶ意欲あふれる学校
重点目標	1 ICT等を活用した「アクティブ・ラーニング」型授業の実現と、芝川小ICT活用教育モデルの実践 2 「ひと」とのつながりを大切に作る学校に向けた心の教育の充実と人権教育の推進 3 学校・家庭・地域が目標やビジョンを共有し、連携・協働するコミュニティ・スクールの実現 4 アイディアを出し合い、新しい学びへと挑戦し続ける学校をつくるための教職員研修の充実

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学 校 自 己 評 価			年 度 評 価		学校運営協議会による評価		
年 度		目 標			年 度 評 価		実施日令和5年2月17日		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策		
1	〈現状〉 ○全国学力・学習状況調査では、国語、算数ともに全国、市平均と比べ低い結果である。市平均と比べると、国語で-5、算数で-6ポイント下回っている。 ○本校では、令和3年度に、令和元年度さいたま市学習状況調査を実施したところ、【学習に関する関心・意欲・態度】の「国語の勉強は好きですか。」「算数の勉強は好きですか。」の質問に肯定的な回答をした児童の割合は、令和2年度より国語で23%、算数で1.5%向上した。 ○タブレットを自由に操り、学習課題の解決に向けた調べ学習やまとめにおいて意欲的に活動する児童が多い。 〈課題〉 ○全国学力・学習状況調査の結果分析から、国語では思考力・判断力・表現力等のB書くこと、算数では図形とデータ活用の領域に課題がある児童が多い。 ○算数への関心が低く、児童が「楽しく分かりやすい授業」だと感じる授業を実践すること、知識及び技能領域の習熟に向けた手立てを講じていくことが課題である。	・ICTを活用した「アクティブ・ラーニング」型授業の実現 ・芝川小 ICT 活用教育モデルの推進	①国語、算数において、ICT 活用を活動の軸にし、問題や発問の仕方、板書、教材教具を効果的に組み合わせた授業を実践し、自分の考えを自由に表現できるようにする。 ②授業研究において、「アクティブ・ラーニング」型の研究授業を実践し、指導事例として蓄積・共有する。 ③体育科・道徳を中心に、自己有用感や互いに高め合う意識を醸成する活動を設定し、全教科において主体的に学ぶ意欲を高める実践につなげる。	①児童アンケートに「ICT を活用した授業が楽しく分かりやすいと思うか。」の項目を新設し、肯定的な回答をする児童の割合が80%以上になったか。 ②全学年で年に1回以上、「アクティブ・ラーニング」型の研究授業を行い、教員の指導力向上に資することができたか。 ③本校を会場とする、市道徳番研修発表及び県小学校体育授業研究会への参画を通して、自身の授業実践に役立つ情報を得ることができたか。	①前年度実績や課題を踏まえ、4月中にモデルを作成し、情報モラル・セキュリティ教育を全学年で実施する。 ②ムーブノートやオクリンク等の共同学習ツールを利活用する能力を高めることで、教え合い・学び合う活動を保障する。 ③情報教育部を中心に、○学年版「ICT 活用1日の流れ」を策定し、学年の実態に即して効果的に運用する。	・ICTに関する児童アンケートでは「楽しく分かりやすい」「どちらかといえば楽しく分かりやすい」と回答した児童が90%を超えたことから、取組に一定の成果があった。 ・研究授業では、どの学年も児童自らが課題を決め、グループ等による対話を中心とした授業を実践した。これにより、「アクティブ・ラーニング」のねらいを意識したことで教員の指導にその兆候が見られた。 ・体育科・道徳の研究を通じて、多くの教員が児童の自己有用感や自己肯定感が高まる活動を全教科で取り入れた。 ・情報教育部を中心に、ICT 活用教育モデルを夏季休業中に作成、9月から順次2年生以上の全学級で指導を行った。これまでにネットトラブル等の報告はない。 ・学習ツールを活用して、友だちと意見や感想を送り合ったり、クラスの意見を集計し員で共有したりする場面が多く見られるなど、学び合う活動が充実した。 ・教職員アンケート集計では、授業におけるICT 活用率が90%を超えるなど、学習ツールが効果的に活用されていた。	B	(課題) ・国語、算数において、ICT を活用した「楽しく分かりやすい」授業を実践できたが、ICT の活用が学力向上に直結しているか検証する必要がある。 (方策) ・校内研修において基礎学力の向上を目指したテーマと方策を検討し、研究主任を中心に全教職員で協議する場を今年度中に2回以上設定し、次年度の計画に反映する。	・インターネットで何でもできる時代を迎えていることから、アクティブ・ラーニングと取り入れた授業を実践したことは評価できる。 ・言われたことはできるが、児童の主体性に課題を感じる。ICT を活用が深い学びにつながるよう、研修を重ねようとする強い意志を感じた。
2	〈現状〉 ○児童アンケート「きちんとあいさつや返事をしている」の質問に肯定的な回答をした割合は、どの学年においても概ね80%を超えている。 ○児童やその保護者に寄り添い、信頼関係の構築・発展を図るとともに、継続的な観察やアンケート等を活用し、児童理解に努めている。 〈課題〉 ○会議や学校行事の準備等に費やす時間を削減し、児童や保護者と関わったり、教材研究等に充てたりする時間を捻出する必要がある。 ○児童一人ひとりの状況を的確に把握し、迅速かつ適切に、組織的に対応する体制づくりが必要である。	・差別のない、児童一人ひとりの安全が確保された学級集団の実現 ・積極的な生徒指導の推進と教育相談、特別支援教育の充実	①放課後に学年・学級のための時間を確保し、コミュニケーションを活性化させるとともに、児童に関する正確な情報を共有する。 ②アンケート等の結果や面談等を通じて、学級等の実態を把握し、適切な指導・支援を速やかに実行する。	①令和4年度末までに生徒指導、教育相談、特別支援教育の情報をICT 上で継続管理するシステムを構築できたか。 ②教職員アンケートでICT を積極的に活用し、個々の特性や関心・意欲に見合った授業や学びの場を提供できたことと回答する割合が85%以上となったか。	①週の日、木の放課後を会議・研修日とし、他の3日間を可能な限り、学年・学級の時間として確保できたか。 ②アンケート結果に基づく面談を結果確認から2週間以内に行い、生徒指導、教育相談、特別支援教育の分掌組織で情報を共有し、適切に対応できたか。	・月末以外の放課後は会議等を入れず、教材研究等の時間として確保した。また、会議や研修自体の必要性を見直し、回数と時間の両面から削減した。 ・児童の情報は、放課後に各分掌主任が情報を集約・共有し、必要に応じて組織的に対応した。	B	(課題) ・心配な児童への対応において、学校と保護者の認識の相違から、難しいケースが徐々に増えてきている。 (改善策) ・学年や担任と校務分掌組織とが連携し、組織的な対応を強化する。	・守ることが正義のルールになっている。校則問題等、生徒指導に関する事項を積極的に見直すべきである。 ・いじめの問題へは、統一した生徒指導をお願いしたい。組織的に対応していることは評価できる。 ・デジタル化に伴い、情報の管理に不安を感じる。情報漏洩等について教職員のスキルを高める研修が必要である。
3	〈現状〉 ○昨年度、学校運営協議会準備委員会を年3回(6月、11月、2月【書面開催】)実施。目指す児童等について熟識し、これからの学校経営(運営)の方向性について仮承認を得た。 ○PTA 組織やおやじの会がよき学校の応援団となり、本校の教育活動への多大な貢献がある。 〈課題〉 ○今年度の協議会でSSN 等地域の教育力を活かした活動として何ができるのかを熟識し、実際に地域総がかりでの活動を展開する必要がある。	・学校運営協議会とSSN 等が連動し、学校と地域の一体感ある取組の充実 ・学校や地域の行事を通じて、互いがつながり合い、共に成長する機会の拡充	①学校運営協議会やSSN に関する情報を学校だよりや学校HP を通じて発信するなど、広く広報活動を行う。 ②学校地域連携コーディネーターがファシリテーターとなり、スクール・コミュニティに向け始動する。	①保護者アンケート「学校の取組に関する情報発信の充実」において、肯定的な回答が80%以上となったか。 ②コーディネーターが中心となり、7月末までにSSN 等地域と連携・協働し、活動案を作成することができたか。	①学校と地域が互いに連携・協働し合う行事を今年度中に2回以上行うことができたか。 ②チャレンジスクールや図書ボランティア等の地域協働活動を4月末までに作成し、5月から活動を開始したか。	・保護者アンケートでは、情報公開に関する項目で93%が肯定的な回答であった。 ・学校安全ネットワーク連絡会を年2回開催した。地域の現状(交通、防犯、防災)について情報共有し、児童の安全に関する活動について協議した。	B	(課題) ・情報発信に費やす時間をどう捻出するか。(時間外作業) (改善策) ・ICT 支援員の協力を検討する。	・積極的な情報発信や学校公開は大切であることから、引き続き努力してもらいたい。 ・コーディネーターが中心となって地域人材を発掘し、色々な経験から多くを学んでほしい。
4	〈現状〉 ○昨年度中は、情報教育部及びエバンジェリストが中心となって、ICT 利用に係る教職員研修を計画的に実施してきた。 ○長期欠席児童やコロナ禍に関連した欠席者へのオンライン授業を計画的に実施している。 〈課題〉 ○ICT の活用では、教職員によって取組に差が見られることから、ICT 活用に係る教材研究を進化させ、校内で共有する必要がある。	・全教職員がアイディアを出し合い、新しい学びへと挑戦し続ける意識を高めるための研修の実施	①毎学期に1回以上、情報教育部及びエバンジェリストが主体となって、ICT の活用実践つながる研修を行う。 ②授業参観や学校公開日、校内授業研究会等の機会を捉えて、全教職員がICT を活用した授業公開を年に1回以上公開し、スキルアップを図る。 ③スタディサプリに関する校内研修を適時に実施し、授業での活用方法等について深く研究する。	①教職員アンケートでICT を活用し個別最適な学びにつながる授業改善ができたことと回答する割合が80%以上となったか。 ②全ての教職員がICT を活用した授業公開等を年1回以上行い、公開することができたか。 ③スタディサプリを効果的に授業に組み込みながら、個別最適な学びに向けた授業改善に取り組んだか。	・各学期に1回以上、ICT を活用した指導法研修を実施した。その結果、教室訪問時に様々な教科等でICT を活用する場面が多く見られるようになり、授業改善が進んだ。 ・全教職員がICT を活用した授業公開を年1回以上実施したことにより、ICT の活用スキル・指導力が向上した。 ・スタディサプリは、導入当初に想定していたよりも利用頻度が低かった。他の学習ツールの使い勝手が良かったため、有効活用には至らなかった。	B	(課題) ・教員が主体的にICT に関するスキルを学び活用するためには、他の業務を見直し、研究に充てる時間の確保が必要である。 (具体策) ・次年度当初からの思い切った業務改善と年間を通じて研修機会の確保を目指す。 ・ICT 研修を学期に1回以上定期的に実施する。	・ICT の使用実践に振り回されず、効果的な学びへのスキルを高めてもらいたい。 ・若手の増加で、学校に活気が出るのはよいことである。その反面、学級経営に関するスキルが心配であり、研修等を通じて学んでほしい。 ・大胆な業務改善案を見て、その成果を期待している。	